

# ふたりのコラム

January 29, 2021

認定こども園あかみ幼稚園 園長 中田幸子  
認定こども園メイプルキッズ 施設長 新井利枝

## 《3・4・5歳児》

新年を迎えて気持ち新たに、どうぞよろしくお祈いします。先の見通しを持ちにくい状況ではありますが、これでは何もできない…とあきらめるのではなく、できることを考え、その中でもしかすると今までよりも良いアイデアが浮かぶかもしれません。そのような発想で、前向きに進みたいと思います。

さて、今年は丑年。丑年は、先を急がず、目の前のことをしっかり進めていくことで、今後が開かれていくそうです。皆様にとって、良い年となりますように……。



## キッズフェスティバル

キッズフェスティバルに向けて、各学年活動が深まっています。



5歳児・・・クラスごとの劇作り。ストーリーも、配役も自分たちで決めています。そのストーリーには、それぞれが園生活の中で体験してきた事柄や、思考が入ってきます。リアルであったり、イメージであったり、ファンタジーであったり…。現実の世界と虚構の世界を行ったり来たりしながら構成されていきます。劇の話を決めたり、道具を作ったりする話し合いの中で、『合意の形成』をしていきます。自分も大切、相手も大切、お互いが良い方法は何なのか……。大人でも難しいことですが、5歳児の子どもたちでもしっかり向かい合うことができるのです。のです。

4歳児・・・自分が頑張れそうなことを決めて、それに向かって頑張る。なかなかうまくいかないときもありますが、それを乗り越えてできるようになる。「がんばったらできた・・・」という自信になり、それが、「頑張ればできるんだ」「自分ってすごいぞ」という『自己肯定感』につながります。この時期自己肯定感を得ることは、もり組になって積極的に活動に取り組もうとする姿勢につながることはもちろん、就学後の学習へ取り組む姿勢や、生涯学習の基礎になっていきます。



3歳児・・・みんなの前で歌を歌ったり、手遊びをしたりして、自分を見てもらう…。自分に注目してもらうことで、自分と他者の違いにも気づく『自我の発見』をしていきます。小さい時期、自分の物は自分の物、他人の物のも自分の物…。というように、友達が使っている物をとってしまうようなこともあったかと思います。その時点では、自他の違いがまだ分かっていないのですよね…。それがだんだんわかってくるのです。

冬のこの時期にキッズフェスティバルを行うのは、『1年間の集大成』であり、この時期でなくてはならないからなのです。状況により、開催方法の変更があるかもしれませんが、その場合でも、保護者の方たちと子どもたちの育ちの共有をしていきたいと思っておりますので、ご理解、ご協力をお願いします。

## かまたき

かまたきが始まります。

もり組の子どもたちが、粘土で作り、それを園の穴窯で焼く『かまたき』が2月末に行われます。これは、ガス窯でも電気窯でもなく、いたって原始的な穴窯で行います。薪を使い、3日3晩、薪をくべて人が行うものです。そこには、前園長 中山の強い思いがあり、私もそれに共感し、大切にしている活動の一つです。

この時期に毎年お伝えしているのですが、よくご存じの方もいるかもしれませんが…

なぜあかみ幼稚園が、『穴窯』にこだわるのか…。

「反復説」という言葉をご存知の方もいらっしゃる方も多くいらっしゃると思います。

『一人の人間が 人類の進化を その人の一生という短い時間で繰り返す』

具体的には、母体の中では羊水の中にいるので「魚類」

→おぎゃあと生まれて肺呼吸するのは生命が海から陸に上がった場面

→その後は、腹這いする赤ちゃんは「爬虫類」

→そして高這いする赤ちゃんは四足の「哺乳類」

→そして歩き始めた様子は、「類人猿」から「人類」への進化に例えられます。

\*生物学的に大まかには現在でも認められ、細部においては“進化”が こんな単純なものでないことを示しています。

このことを幼児期の子どもたちに当てはめて考えてみますと、幼児期の子どもたちは、「縄文時代を生きる人々」に例えられるのではないかと考え、幼児期の子どもたちが焼き物に出会うとき、もっとも原始的な方法であるべきである。つまり、幼児期の子どもたちの教育を考えると、焼き物を作るには、電気窯でもガス窯でもない「穴窯」でなくてはならないということです。

もり組の子どもたちは、園に残していく思い出のプレートと記念に家に持ち帰る作品を作りました。粘土で作品を作る場合、立体物は、大きな塊のままでは割れてしまい、中に空洞を作らなくてはならないことや、パーツの接着は、「ドベ」という粘土をのり状に柔らかくしたものでつけていくなど、粘土の性質を理解しながら行わなくてはならないことがたくさんあります。泥粘土で、すぐに作品ができるわけではなく、団子を繰り返し作り、泥粘土の感触や泥粘土に触れる感覚を味わうことや、ちょっとした立体物を作ることなど、それには体験の積み重ねが大切になってきます。粘土の活動だけではなく、小さい学年からの体験が積み重ねられて、年長児そして就学後の成果に意味を成しているのです。幼児期は、人生を豊かに送る土台作りの時期なのですね。

(文責：中田)



## 《0・1・2歳児》

あらためまして、今年もよろしく申し上げます。

コロナウイルス感染症が猛威を振るい、栃木県でも緊急事態宣言が発せられる中、保護者の皆様には、感染対策にご協力いただきありがとうございます。今後も、感染対策をしっかりと行いつつ保育をしていきたいと思えます。

また、これから本格的な寒さがやってきます。水分や休息をしっかりとって元気に過ごしていきたいですね。



今月の手作り弁当の日のこと、2歳児クラスのある男の子が、保育者のお弁当箱を見て一言「あ、それ、オトトでしょ？」とうれしそうに声をかけてきたそうです。保育者は一瞬??と思ったようですが、お弁当箱のトトロの絵を見て、いい間違いに気付いたようで、さり気なく「うん、トトロだね」と答えたそうです。納得いかないその子は、「違うよ、オトトだよ」と言っていたそうですが・・・。

そんなかわいいエピソードを聞いて、思わずほっこりしてしまいました。他にも少し前のことですが、ある女の子が私に向かって「今日、私スイミングソクなの」と一言。私が「夜寝るの遅くなっちゃったの?」と聞くと「違うよ、スイミングソク、プールに行くの」とのこと、あー!! スイミングスクールね、確かに発音似てるよね!と思わず笑みがこぼれてしまいました。

小さいうちって言葉も発達途上で、言い間違いやサ行タ行が上手く言えないなどがよく見られます。私の息子もまた然りで、小さい頃は力行サ行が苦手で上手く発音できず、友達を呼ぶ時〇〇とうん(君)となっていました。そんな息子をかわいいな~なんて思っていたのですが、市の5才児健診で言語聴覚士の方に、言葉の教室を勧められました。いつかはなおるよね?なんて楽観的だったのですが、成長しても、くせとして残ってしまい、正しい発音が自然に習得しづらいこともあるそうで、息子は言葉の教室に通いだしました。楽しく舌の使い方の指導をしてもらったらしく、息子は喜んで通い、半年足らずで力行サ行をマスターしてしまいました。

多くの場合、子どもは自然にたくさんの言葉を覚え、大人が使う言葉の発音を真似したり、修正しながら少しずつ正確な発音ができるようになっていきます。赤ちゃん言葉等、心配しすぎる必要はありませんが、子どもの言葉が増えてきたら、大人は正しい言葉を使うようにして、4,5歳になるころには自然に切り替えられるようにしていくと良いそうです。また、息子のように、発音が聞き取りにくかったり、滑舌が気になったりする場合など専門的な方に相談するのもよいかもしれませんね。

余談ですが・・・言い間違いは、子どもだけにあらず。私の母は、コロナのことをいつもコレラと言い間違えています。

そのたびに「コロナだよ!」と芸人ばりに突っ込みを入れている私です(笑)。

さて、またまた息子の話になってしまいますが・・・

我が家の息子は、言葉のみならず、健診で発覚したものが他にもありました。

小学校入学前に行われる就学時健診、各小学校で実施されるのですが、そこでの眼科健診でのこと。みなさんも一度は経験したことがあるとは思いますが、片目ずつ検査をし、みんな左右上下を指さしていました。息子の順番になり、その様子を見ていたのですが、なぜか息子は指を前にさしていました。担当の先生に説明されても、まっすぐ前を指さす息子……。普段の生活で特に見えにくさなど感じていなかったのに、理解力が足りないんだと、トホホな気分で見えていました。案の定、「眼科医受診のすすめ」のお手紙をもらって来た息子。検査がちゃんとできなかったのね、程度にしか思っていなかった私。

しばらくしてから、眼科を受診しました。すると、医師からは「お母さん、この子の片方の目は、強度遠視で眼鏡をかけても視力が出ない弱視です。すぐに眼鏡を作ってください」と言われました。

え～！遠視？弱視？しばし、私の頭の中はパニックになってしまいました。検査のとき前をさしていたのは、本当に見えてなかったんだと、楽観視していた自分を反省しました。医師によると、小さい子はまだ完全な視力ではなく、成長につれ発達し6歳くらいでしっかり見えるようになるそうです。また、遠視など、早めに矯正眼鏡をすることで成長を促し通常の視力に近づけることもできるようです。息子の場合、片目は通常に発達していたので気付きにくかったんだろうとも言われました。3歳児健診の際には、家で行う簡易的な視力検査だったので、まさかよく見えていなかったなんて、思いもしませんでした。

その後、眼科医から眼鏡店へ直行し眼鏡を新調しました。息子も嫌がらず、周りの友達にもかっこいい！なんていわれ上機嫌で眼鏡生活が始まりました。が、しかし、我が家の息子は・・・眼鏡を落したり、転んだり・・・何個眼鏡を壊したことが、そのうちに、予備の眼鏡を用意していつ壊れてもいいように対応していました。そして中学生になる頃には、随分遠視も減り、何とか裸眼で生活できるようになりました。ちなみに、最近の3歳児健診では、機械を使用しての視力検査で早期発見できるようですね。

こうして振り返ってみると、息子は、健診によっていろいろと助けられたことが多くありました。

市などで行う健診は早期発見や関係機関とつながることのできる貴重な機会でもあります。他にも、育児の悩みや不安なども相談できます。我が子のためにも、みなさんぜひ活用していきましょう。心配しすぎるのも良くありませんが、私のように楽観的すぎるのも・・・、考えものですね（汗）。

そして私も、もうアラフィフ、そろそろ自分の体の心配もしなければ・・・しっかり健診を受けて健康に過ごしていきたいと思います。

（文責：新井）

